

鳥取市内の稲村三伯関係遺跡

一「稲村三伯先生 生誕之地」石碑

鳥取市川端三丁目二六番地 滝本塗装店前

三伯は、宝暦八年（一七五八年）、川端三丁目の松井如水という町医者の子として生まれた。この生誕地の碑は昭和二十七年の鳥取大火後、屋敷跡地が宅地化され不分明となったため、昭和三十一年一月、三伯を顕彰する人々（代表・川上貞夫）によって町内の稲荷神社の前に建てられた。しかし、平成六年六月、石碑は同町内会の都合により滝本塗装店前に移された。

二「稲村三伯顕彰碑」

鳥取市本町一丁目二〇番地 遷喬小学校前庭



「ハルマ和解」完成200年の記念の碑

ズレリーフ像は山本兼文の作で、その側に香川景樹の歌「いく葉 くすしき種のひとくさ を 豊あし原にまきし人これ」（川上貞夫筆）が彫られている。

三 稲村三伯「ハルマ和解」完成二〇〇年記念の碑

鳥取市戎町三一七番地 鳥取県医師会館前

平成八年二月十七日、鳥取県医師会（会長・入江宏一）と稲村三伯顕彰会は、三伯が寛政八年（一七九六年）二月十八日、我が国最初の蘭和辞書である「ハルマ和解」を完成したその二〇〇年を記念し建立された。題字は入江宏一による。

（稲村三伯顕彰会代表 森 納）

蛭田玄仙先生顕彰碑建立及び生誕二百五十年祭の記

所在…平成七年十二月二十四日、福島県東白川郡鮫川村渡瀬

蛭田流産科の開祖東翁蛭田玄仙（克明）が江戸時代の産科学の向上発展に貢献した業績が本学会員二宮陸雄氏の『蛭田玄仙とその産科』（平成五年）刊行によって出生地福島県東白川郡鮫川村に強烈な文化的衝撃を与え、全村を挙げての顕彰事業が企画された。

すでに吉田富三記念館の設立に尽力された隣村（石川郡浅川町）の富永健福島県医師会理事・富永国比古会員の尊父が世話人となり、平成七年七月三十一日、産科医蛭田玄仙顕彰事業打合せ開催同年八月、日本母性保護産婦人科医会、福島県医師会、日本医史学会の協力を得、九月三十一日、芳賀文雄鮫川村長を委員長とする「産科医蛭田玄仙顕彰事業実行委員会」が結成された。

二宮陸雄氏が顕彰碑建立基金用として寄贈された著書一五

○冊の頒布を初め顕彰碑の建立、生誕二五〇年祭、記念講演・式典が企画された。

平成七年十二月二十四日、顕彰碑の除幕式と生誕二百五十年記念法要が同村渡瀬の長雲山智徳院観音寺(蛭田家菩提寺)で行われた。

本会から蒲原宏理事長が代表として参列し祝辞を捧げた。当日は村長以下村民一五〇名余、福島医大産婦人科学教室佐藤章教授を初め県医師会関係者多数が参列しそれぞれ祝辞を呈された。法要後、公民館で記念式典。二宮陸雄氏の表彰が行われた。(二宮氏は所用のため欠席)。

富永健氏の記念講演は「富士川游先生が白河駅から人力車で鮫川村渡瀬まで数十キロの道を蛭田玄仙の子孫を訪ねて来られ、詳細に調査を行い、その時蛭田家の女の子に、女医に



蛭田玄仙先生の顕彰碑

なるようにと熱心説得された。そのためには学資を勿論の事あらゆる援助をすると約束されたが、実現に至らなかった」という富士川游先生を案内した産婦人科医であった父の実話、その父から富士川游先生の『日本医学史』を入学祝に贈られた」など感銘深い追憶談であ

った。

会場には同村渡瀬字田苗下に住まわれる御子孫蛭田覚氏(石工として顕彰碑を彫刻された)の宅に残存している玄仙翁関係の資料の展示が行われ、子孫蛭田覚氏の謝辞で閉式。

顕彰碑の篆額に相当するものに蛭田玄仙の七十歳の直筆「産科済生」を拡大し刻まれている。碑文及び碑陰の刻文は次のようである。

東翁蛭田玄仙先生の碑

一七四五年・延享二年　ここ鮫川村渡瀬の農家に生まれた蛭田玄仙先生は、難産で命を失う産婦とその家族の嘆きをみて産科済生の志を立て、権威にとられない独学自験により独自の蛭田流産科を創始した

先生は、東北から関東まで一杖一笠四方に赴いて、名利を離れて仁術を施し、多くの産婦を救い、その術は門人たちにより遠く名古屋にまでも伝えられた

東翁蛭田玄仙先生の生誕二五〇年に当り、その産科済生の偉業をたたえるため、ここに碑を建てて記念とする

一九九五年十二月二十四日

産科医蛭田玄仙顕彰事業実行委員会

鮫川村

日本医学史学会

日本母性保護産婦人科医学会

福島県医師会

題字　東翁蛭田玄仙先生七十歳当時の直筆

東翁蛭田玄仙先生の事績

蛭田玄仙先生の名は克明 字は至徳といい玄仙は号である
 江戸時代後期 当時は京都の賀川流産科が関東にも広まり
 産科医の十中八九がその流れを汲んでいたが 玄仙先生は独
 学自験の末 賀川流とは異なる独自の蛭田流産科を考案した
 玄仙先生三十三歳の時である
 特に出産に際しては「仰臥を以て跪坐に優れり」とし それ
 まで坐ったまま出産していたものを 仰向けに寝てお産をす
 ることにより 産婦にかかる負担が少なく 回復も早いこと
 を究明し 仰臥位出産を奨励した
 また 難産は「手を用いて施術することが簡にして かつ効
 多い」として 手指をもって処置する用手産法を編み出した
 ほか 胎児の位置を矯正し 難産解消を図り「安産の神様・
 東翁」と称讃され 尊敬と信頼をあつめた
 このように玄仙先生の蛭田流産科とその思想は 当時わが国
 の出産法に改革をもたらし 賀川流産科に代わる近代産科の
 先駆として その基礎をなすものであった
 玄仙先生は 晩年を江戸に住み 文化十二年(一八一五年)十
 月七十一歳の高齢にもかかわらず 関西にその産科を広めよ
 うとして京都に上る途中 箱根で病に倒れ 翌春渡瀬の生家
 に運ばれて静養したが 文化十四年(一八一七年)春正月三日
 七十三歳にしてこの世を去った
 ここ長雲山観音寺は 玄仙先生の菩提寺であり 生誕二五〇
 年を記念して この境内に顕彰碑を建立する

平成七年十二月二十四日

鮫川村長 芳賀文雄 撰
 大字渡瀬字江竜田 芳賀弘 書
 大字渡瀬字田苗下 蛭田 覚 石工

なお顕彰碑の台座には次の刻名がある。

産科医蛭田玄仙顕彰事業特別功労者

日本医史学会会員 二宮 陸雄
 医学博士

著書「蛭田玄仙とその産科」一五〇冊寄贈

産科医蛭田玄仙顕彰事業実行委員会

- | | | |
|------|-----------|-------|
| 委員長 | 村 長 | 芳賀 文雄 |
| 副委員長 | 議 長 | 藤田 好幸 |
| 委員 | 副 議 長 | 関根 貢 |
| | 総務常任委員長 | 前田 武久 |
| | 厚生文教常任委員長 | 船木 彦助 |
| | 農林建設常任委員長 | 金沢 省道 |
| | 赤坂西野区長 | 高坂 久男 |
| | 赤坂西野区長 | 関根 功男 |
| | 赤坂中野区長 | 小松 幹夫 |
| | 赤坂東野石井草区長 | 佐藤 一 |
| | 富田区長 | 松本 克己 |
| | 渡瀬区長 | 赤坂 基 |
| | 青生野区長 | 石塚 寛 |
| | 医師会富永医院 | 富永 健 |

縁故・地域関係者

蛭田 覚

蛭田 栄次

蛭田 正

蛭田 一

芳賀 弘

蛭田 晃

津田 彰夫

緑川 清幸

鈴木 英亮

前田 守保

関根 武捷

高坂 幸男

斎藤 實

添田 剛弘

蛭田玄仙先生及び一族の墓碑は同村福原共同墓地にあり、
本会を代表して献花掃苔を行った。まことに小さな墓碑に
文化十四丑檢

「雲菅玄薫清信士靈位

正月初三萱」

とある。左の拙句を献ずる。

○三尺に足らぬ名医の冬の墓　ひろし

交通・大変不便な所なので、予め鮫川村役場に道順を問い
合わせるのがよい。

鮫川村役場(生涯学習課・教育委員会又は緑川助役)

福島県東白川郡鮫川村大字赤坂中野字新宿39-5、電話
〇二四七-四九-三一一、FAX〇二四七-四九-二六
五一、〒九六三-八四

(蒲原 宏)

日本医史学会関西支部一九九六(平成八)年春季大会

共催 京都医学史研究会

とき 一九九六年五月十九日(日)午前九時半

ところ 京大会館

開会のことば

長門谷洋治

一、グレイ解剖書第三八版一九九五 栗本 宗治(西宮市)

二、京都癩狂院長高松彝よりフィラデルフィア癩狂院長への
答弁書―長遠寺資料補遺― 藤田 俊夫(京都市)

三、トバ・バタク地方におけるライン伝道会の医療活動

安田 純一(西宮市)

四、エルサレムの聖ヨハネ騎士団病院

泉 彪之助(金沢市)

五、坪井信友の億川信哉宛の書簡

○中山 沃・亥野 彊(西宮市)

六、『餞甥雜記』―長崎浩齋から佐渡三良へ―

正橋 剛二(富山市)

七、医家先哲墨跡供覧―佐藤尚中・長谷川泰・吉岡彌生―

杉立 義一(京都市)